



科学者は科学によって闘うことができる —宗川論文「福島原発災害と科学者」はどこに導くか

嶋田一郎

筆者は2012年『日本の科学者』8月号の小論「真の学際性と新しい科学者の社会的責任」で宗川氏に、科学の価値中立性を否定されるのかと問うた¹⁾。筆者の問いかけは無視されたが、今回の宗川氏の論文(『日本の科学者』2013年7月号)²⁾では、単に否定されるだけでなく、「権力に科学の独占を許してしまう(科学の価値中立説)」「結果として、価値中立説は科学を権力の手に渡す仕掛けになった」と断定された。この観点に立って、日本科学者会議第19回総合学術研究集会で基調講演された池内了氏の見解を、価値中立説に立つものとして批判された。

科学の価値中立性を否定する宗川氏の見解が、どこに導くかが大いに危惧されるので、以下科学の価値中立性に論点を絞ってコメントしておきたい。

筆者は昨年的小論で、科学者の社会的責任を論ずるにあたって、科学(的真理)と科学者(の価値観)を区別することを主張した。科学者は価値中立ではなくさまざまな価値観を有するが、科学的真理は価値中立でなければならない。価値中立でなければ、実験、観察、実践、論理(議論)などによる検証という科学的営為の正当性が保障されないからである。そのうえで科学的真理と科学者の価値観の相互関係を議論すべきである。

しかし、科学的真理は絶対的真理には到達できないから、ある時代、ある分野の科学的真理とその実証の過程で、価値観が反映することは当然である。だからこそその科学的真理の客観性(価値中立性)がどの程度担保されるかの検証が、科学的営為に不可欠なのである。科学的真理の価値中立性は、論理性などと同様に、科学的真理の土台であり、科学的実践の指針である。聖域ではない。

科学者はその価値観によって権力側に立つこともあるし、宗川氏のいう民

衆側に立つ‘自立的科学者’になることもある。しかしその区別は、レッテル貼りにならぬよう実践的には慎重でなければならない。

さらに科学は、それに基づいて開発された「産物」とも区別されなければならない。後者は価値を有する。核物理学は科学的真理であるが、宗川氏が”絶対悪”といわれる価値を有する核兵器は、直接的ではないが、その「産物」の一つといえる。しかし権力側の立場に立てば、“必要悪”にもなり得る。

宗川氏は核兵器や原発(絶対危険—宗川)をつくりだした核物理学(科学的真理)も“絶対悪”ではないのかと主張する。核兵器を”絶対悪”とみなした湯川秀樹もおそらく賛成できないこの短絡的主張は、「科学的真理」とそれに基づき開発された「産物」の区別がまったくない。この誤りは、例えば、前進への可能性の見えてきた「核兵器のない世界」でも、核物理学の存在は否定できないことでも明らかである。

宗川氏は戸坂潤の『科学論』から「科学は……或る特定の而も支配的な社会階級乃至社会身分の占有物だったのである」を引用して、科学者を階層として現体制の権力の一部を構成していると主張する。『科学論』にはこのあと以下の文章が出てくる。「即ちその限り科学は大衆化されず大衆性を有つことが出来ない」³⁾。

しかし、時代背景の違いに注意する必要がある。現代においては、科学はその急速な発展により従来にも増して社会にきわめて近接しており、巨大な資本の力により、短期間のうちに社会に大きな影響を与えるようになった。日々膨大なその「産物」や「情報」にとり囲まれて生活している民衆は、科学に無関心、無縁ではいられない。原発事故による放射能汚染は、その最たるものの一つである。科学は、内実はともあれ大衆化せざるを得ないし、日

本科学者会議も「国民・市民と広く共同して、研究の普及活動」(しおり)を積極的におこなっている。もはや科学は権力の占有物ではないし、してはならない。

宗川氏のいうように科学の価値中立性は、権力にとって安心で都合なばかりではない。両刃の刃である。だからこそ権力はしばしば科学的真理を歪曲し、隠蔽し、弾圧するのである。ガリレオは科学のために教会という権力と闘わざるを得なかった。

宗川論文の主張の行き着くところは何か。宗川氏がいま求められているという‘自立的科学者’(日本科学者会議の会員を含むという)か権力と闘うのに、科学を武器にできないことである。なぜなら宗川氏によれば科学は権力の占有物だからである。科学無しで‘自立的科学者’はいついても何ができるのか。どうしたら99%の側に立って闘えるのか。

科学の価値中立性を認める立場からはまったく事情が異なる。価値中立の科学的真理の探求という共通の土俵のうえで、価値観の異なる権力側の科学者と堂々と闘うことができるのである。そのためにも‘自立的科学者’は、科学的真理(と方法論)の武器をいつそう磨く必要がある。宗川氏の主張は、闘う‘自立的科学者’の武装解除につながる恐れがある。また多くの一般科学者を権力側に追いやる危険性がある。筆者は、日本科学者会議の自己否定になりかねないと危惧するものである。

注および引用文献

- 1) 嶋田一郎「真の学際性と新しい科学者の社会的責任—宗川、館野、坂東各論文へのコメント」『日本の科学者』47(8),30-33(2012)。
- 2) 宗川吉汪「福島原発被災と科学者」『日本の科学者』48(7),41-43(2013)。
- 3) 井原總氏(東北大学名誉教授)のご教示による。

(しまだ・いちろう:宮城支部,複雑系科学)